

第 20 回「日本医療薬学会」

2010/11/17

シンポジウム「薬剤師が関わる褥瘡診療、最前線！！」

11月13日の日本医療薬学会では、「薬剤師が関わる褥瘡診療、最前線！！」という題のシンポジウム（座長：松原肇・北里大学病院薬剤部、二村昭彦・藤田保健衛生大学七栗サナトリウム医療技術部薬剤課）が開かれ、病院・薬局薬剤師が褥瘡治療に果たす役割や活動の実際が、最前線で活躍する演者を通じて紹介された。

演者は、国立長寿医療研究センターの皮膚科・磯貝善蔵氏や薬剤部・溝神文博氏、岡波総合病院薬剤部・森川拓氏、チューリップ薬局平針店・水野正子氏の4人。

まず医師である磯貝氏が、褥瘡の病態や薬物治療の概要を解説。「褥瘡の病態は多様で変化しやすいため治療が難しい。だからこそ薬剤師の専門知識が生きてくる」と強調した。例えば、軟膏は薬効成分が少なく基材が大部分を占めるため、先発医薬品と後発医薬品の基材の違いが治療効果に影響を与えると説明。同センター褥瘡対策チームの薬剤師はその点も踏まえて薬剤提案を行っていることを例に、褥瘡治療で薬剤師が力を発揮していると評価した。

次に講演したのは、薬剤師で同センター褥瘡対策チームの一員である溝神氏。同氏は「薬剤や創傷被覆材を提案するためには、病態の評価を行わなくてはならない」と述べ、回診時に患者の創面水分量のチェックや写真撮影などを実施し、病態の評価を行っていることを説明。また、褥瘡治療では創への外力を考慮した薬剤管理指導が重要になり、患部を固定するためのテーピングや、マットレスの確認なども行っていると述べた。こうした薬剤師の取り組みの結果、同センターにおける褥瘡患者の治癒日数が短縮したほか、日本褥瘡学会社会保険委員会が公表する平均治癒日数の約3分の1になったことを報告。「薬剤師の参画は医療費削減にもつながる」と力強く述べた。

森川氏もまた、院内における褥瘡対策チームの取り組みを紹介。月1回の回診に同行するだけでなく、気になる症例に関しては日々の処置に立ち会うなど、積極的に病棟へ向かう姿勢を示した。また、急性期病院では褥瘡が治らないまま退院するケースが多いことを挙げ、「褥瘡治療では、地域連携が1つのテーマになる」とした。

一方、NPO 法人愛知県褥瘡ケアを考える会の発起人でもある水野氏は、「在宅は、治療の前に患者の生活を知ることが大切」と強調。また、薬剤師は薬を患者に渡して説明するだけでは不十分で、処方設計をする上で全身状態の観察や服薬アセスメントなどを実施することが必要であると述べた。

こうした演者の発表を受けて、二村座長は「薬剤師が関わることで、これだけの治療効果を見せるのは、ほかの疾患領域では考えられない」と強調。松原座長も「褥瘡治療は薬剤師の技術が一番生きる」と述べた。